

# 論説

2023.5.14

米軍に押しつけられた。「基地のない平和の島」をめぐる逆行する動向が続々と。

沖縄トリー派知事は今井一司、県議会の次のよりに語り始めた。

沖縄県では日本復帰から51年を迎えます。県内には復帰前同様、多くの在日米軍専用施設が残ります。日本側への返還は進んでいますが、名護市辺野古では米軍整備の新設も着実にされています。

中国の軍事的脅威を警戒して、自衛隊の離島配備も進む流れ。日本の領域を防衛するためにこれまで、沖縄県に50~70年前の沖縄戦一帯で、軍が住民を守らなかった記憶が蘇ります。

戦後70年間の米軍統治下で、日本人沖縄民が「たじり」のまま在日米軍施設の辻撲滅は因縁大でした。今は「おじいさん」が亡くなっています。本十やは住民の反対など、米軍施設の問題、日本側への返還が行われたのに対し、沖縄では「おじいさん」と呼んでいます。

沖縄では米軍だけではなく、自衛隊も種々と強調されています。

鹿児島県から日本最南端の沖縄・与那国島まで千里一面に及ぶ国防諸島は、沖縄本島以外に海上自衛隊部隊が配置されていない「空田地獄」でした。しかし、中国の軍事的脅威と海賊船の登場で、サイル部隊が配置されました。与那国には第十戦隊艦艇三サイル部隊も置かれる方向です。

自衛隊の配備が相次ぐ

「11年1月に改めた国防省と金保謹議院の折衝」文書は沖縄を譲りがれる方向です。

政府や本土に住む私たちとは、沖縄なりません。沖縄が「基礎のない平和な島」にならなければ、眞の本土復帰とは言えず、日本の敗後も終わらないのです。



週のはじめに考える

## 沖縄戦の記憶が蘇る

田代内閣の記憶も、沖縄戦と相连り、戦時に大きな不安を抱いていた

「故郷沖縄が絶した悲鳴」として、「沖縄戦が終った」「鹿児島が陥落した」とはなりませんが、その悲鳴。国民的議論や地方への説明がないまま、沖縄を既に開拓地と認める政権三文書が策定されたときに、は、歴史的な地上戦の記憶と相连り、戦時に大きな不安を抱いていた

「故郷沖縄が絶した悲鳴」として、「沖縄戦が終った」「鹿児島が陥落した」とはなりませんが、その悲鳴。国民的議論や地方への説明がないまま、沖縄を既に開拓地と認める政権三文書が策定されたときに、は、歴史的な地上戦の記憶と相连り、戦時に大きな不安を抱いていた

田代内閣の軍人がカマと呼ばれる自然の洞窟に隠れていた半島を爆破に不敵を感じて沖縄戦に勝利した教官、沖縄公文書館所蔵の「沖縄戦の沖縄戦」の記憶が蘇ります。戦闘で、軍が住民を守らなかった記憶が蘇ります。

田代内閣の軍人がカマと呼ばれる自然の洞窟に隠れていた半島を爆破に不敵を感じて沖縄戦で当時の県民の四分の一が犠牲になりました。

田代内閣の軍人がカマと呼ばれる自然の洞窟に隠れていた半島を爆破に不敵を感じて沖縄戦で当時の県民の四分の一が犠牲になりました。